

Badam-ochir Elbegzaya

中部学院大学大学院 人間福祉学研究科 博士課程

豪雪地帯における高齢者生活支援

豪雪地帯における「独り」もしくは「夫婦のみ」で暮らす高齢者世帯の生活支援が大きな課題となっている。高齢者が雪下ろしの過労により死亡するケースや、屋根の雪下ろし作業中に転落して死亡する事故が多い一方、雪国で最大の問題となるのは除雪作業である。除雪作業の他、雪のため高齢者が外出できなくなったり、通院など医療サービスを受けられなくなったりする。更に、過疎高齢化に伴い、雪処理の担い手不足は深刻な問題となり、今後も一層進行する事が予測される。

県及び市町村では、高齢者のみ世帯等要援護世帯の冬期生活を確保するための除雪支援事業及び高齢者を冬期のみ受け入れる冬期在住特別施設事業がある。除雪支援事業の内容・目的はどこの県でも同じであるが、対象となっている高齢者の年齢・除雪作業の経費の自己負担が様々となる。高齢者の冬期生活を守ろうと行政が冬だけに受け入れる施設を確保しようという試みがあっても、住民は住みなれた家からなかなか離れないのが現実である。又、雪に対する考え方が地域や個人によって大きく異なる事が調査の結果で明らかとなった。雪のないところで生活したいという人がいる一方で、住み慣れた環境の中で、雪と共に暮らそうとする人もいる。また、雪を利用することによって、新しい地域文化誕生の事例もあった。災害への対応を契機に生まれる新しい地域文化の育成と、それに基づく地域生活の充実を図ることの重要性を強調したい。一方、雪は住民の生活に大きな影響を与えるが、雪から切り離すだけでは問題は解決できない。既存の諸施設を柔軟に活用し、地域の独自性を生かして、災害への対策を進めるべきであろう。各地の状況があまりに異なっていることから各地の特徴を把握した上での対策が必要であると考えられる。